

Republic of Armenia and the Republ



プラネティストが行く 18

## ジェノサイドを 乗り越えた客観的事実

中村 繁夫

「えっ、150万人ですか?」、思わず案内人に聞き返した。アルメニアのモリブデン鉱山訪問の後、首都エレバンにあるアララト山を遠くに望む丘上の虐殺博物館で、想像を絶する犠牲者の写真を見たときのことである。1915年の第2次アルメニア大虐殺の犠牲者の数は、150万人とも言われている。若い女性の案内人はケマルパシャの極悪非道を訴え続けた。ケマルパシャといえばトルコ独立の父(アタチュルク)と呼ばれた初代大統領である。

トルコから見れば英雄であっても、アルメニア側からすると憎しみの対象でしかない。以来1世紀にわたって、両国は国交を断絶しているが、時の経過とともに当時の事実関係を証言できる人も居なくなり、歴史の事実が封印されたままとなっている。

ところが、今年10月10日にスイスで歴史的かつ電撃的な両国の和解合意がなされた。米国のクリントン国務長官とロシアのラブロフ外相立会いのもと、両国の外務大臣により国交回復の調印がなされたのである。カフカースの外交関係の複雑さを考えると、今回の調印は日本と北朝鮮の国交正常化よりも奇跡的な合意である。

国内のアルメニア系移民に配慮をする米国と、エネルギー戦略上の思惑が見え隠れするロシアにとってみると、アルメニアとトルコの和平は望ましいが、当事者には簡単に清算できる問題ではない。部外者にとっては客観的事実だけで合理的な判断ができて、当事者にとっては過去の痛みが増幅されている分だけ、主観的観念に支配される。

アルメニアは、東をアゼルバイジャン、西をトルコ、南をイラン、

北をグルジアに囲まれた内陸国家である。人口は300万人足らずだが、米露など国外に650万人の移民がいると言われている。彼らは商才に長けた移民集団で、アルメニア商人1人に対して、ユダヤ商人が3人寄っても、その商才では敵わないと言うぐらい商売が上手い。移民したアルメニア人は、柔軟性を持って生きてゆかざるを得なかったが、国内に残ったアルメニア人は閉鎖的で頑固な印象が強い。苛められた民族は過去の歴史にこだわりを持ち、プライドを大切にすするあまりに頑迷になるのかもしれない。

トルコは、地政学的に中央アジアから欧州へのエネルギー輸送の要衝であり、イスラム教にこだわらず経済的にも近代国家を目指した。そこには、西洋と東洋の分岐点と接合点の役割を担い、歴史的にも民族主義と共和主義の統合など、相反する要素を攪拌して飲み込んでしまう多様性の強みを感じられる。

アルメニアとトルコの雪解けには、2つの世界潮流が関係している。オバマ大統領による「対話と国際協調」を掲げた米国は、防衛計画を見直し、ポーランドの迎撃ミサイルとチェコのレーダー施設の配備計画を中止。ロシアも、これを歓迎し国際協調体制を構築しつつある。ロシアとグルジアのように、局部的な衝突は続くが、大きな流れとして国際協調が芽生えはじめている。また、資源インフレがいつ再燃するとも限らない。カスピ海の原油・ガスは、不安定なグルジアだけでなく、アゼルバイジャンからアルメニアへの輸送ルートがあったほうが欧州には望ましい。アルメニアにとっても、経済的に欧州に近づくには、トルコとの和解が必要となる。これらが、アルメニアに客観的事実という「実」を選ばせたのだろう。

両国はまだ「歴史認識」という主観的観念を乗り越えたわけではないが、それ以上に大きな世界の潮流を意識しているはずである。世界の流れは例外なく歴史的な数々の重荷を背負った世界観と歴史観を新たな価値観に変えて共有し始めている。

⑦

〔なかもろ・しげお〕1947年生まれ。レアメタル専門商社AMJ社長。近著に「放浪ニートが340億社長になった」(ダイヤモンド社)



アルメニアの首都エレバンから望む、旧約聖書でノアの箱舟が漂着したとされるアララト山(当頁・photoxpress/AFLO)  
トルコのダーヴトオール外相(右)に比べて表情の硬い、アルメニアのナルバンジャン外相(左)(前頁・ロイター/アフロ)